

ペテロの手紙第二2章6-9節 「痛む正しい心」

### 1A 不敬虔な者たちへの裁き 6

### 2A 正しい人口 7-8

#### 1B ソドムの住人

#### 2B 不法な行いに対する心痛

### 3A 誘惑からの救い 9

#### 1B 救われるまで待つ方

#### 2B 正しくない者の処罰

## 本文

ペテロの手紙第二 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、1 章まで前回来ました。今日は、2 章を午後礼拝で一節ずつ見ていきます。今朝は、6-9 節に注目します。「<sup>6</sup> また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、不敬虔な者たちに起こることの実例とされました。<sup>7</sup> そして、不道徳な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人、口を救い出されました。<sup>8</sup> この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。<sup>9</sup> 主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。」

### 1A 不敬虔な者たちへの裁き 6

ペテロ第二の 2 章は、偽教師が教会の中にひそかに入り込んできている問題について、ペテロが取り扱っています。彼らは、自らに速やかな滅びを招くことになるとペテロは告げています。そこで、ペテロは、聖書に書き記されている、神の容赦ない裁きについて語っています。初めに、罪を犯した御使いたちです。地獄に投げ入れられています。次に、ノアの時代の不敬虔な者たちです。洪水によって滅びました。そして、次がソドムとゴモラです。それが、今、読んだ箇所です。

ある時に、神学者と言われる方が、黙示録についての火の裁きは、象徴的表現にしか過ぎないという意見を書いているのを見ました。子羊なるキリスト、優しく、柔和な方が、そのような暴力を働くことは考えられないから、字義通り取るべきではないという意見です。そこで、私がすぐに思い浮かんだのは、ここに書かれている歴史的事実です。もし、ソドムとゴモラに火と硫黄が降り注がれて、「創世 19:28 まるでかまどの煙のように、その地から煙が立ち上っていた。」とありますが、これは比喩的、象徴的なのでしょうか？

そして、火による苦しみを味わっている人々は歴史を通じて、今の世界を見ても至る所にあります。そのような苦しみを与える者たちに対して、主は同じ痛みをもって報いられるということは、

苦しめられている人々には、深い慰めになります。正しい裁きが行われることが、神の愛の現れであるのに、それが子羊の愛とは相いれないというのは、火の苦しみも、多くの苦しみも知らないことの現れです、安逸の中にいる人々が考え付くような考えです。

このように、異端と言わないまでも、主が火をもって裁かれるということを否定しようとする教え、ペテロがまさにここで警告していることが、教会の中にも忍び込んでいるのです。主は、不敬虔な者たちを裁かれます。

## 2A 正しい人ロト 7-8

しかし、主は、義人を滅びから救われます。これは、聖書全体に貫かれている教えです。たとえ、地上に神の裁きがあっても、主はご自分の恵みに見出された者たちを、お救いになります。

### 1B ソドムの住人

けれども、ロトは、正しい人なののでしょうか？ロトについて「正しい」という言葉が、7-8 節で 3 回も出てきます。けれども、ロトの生涯を創世記から読んでいる人は、そのように思えません。ロトの家畜と、おじのアブラハムの家畜がどちらも多くなってきて、一緒に住むことができなくなってきました。それで、アブラハムが別れて住むことを提案しました。彼に住みたいところを選ばせて、譲ったのです。それで彼が選んだところが、ソドムの近いところに住み始めました。

「13:10-12 ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、【主】がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったので、その地はツォアルに至るまで、【主】の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。11 ロトは、自分のためにヨルダンの低地全体を選んだ。そしてロトは東へ移動した。こうして彼らは互いに別れた。12 アブラムはカナンの地に住んだ。一方、ロトは低地の町々に住み、ソドムに天幕を移した。」とあります。目に見えない神の約束ではなく、目に見える、地の豊かさを見て、そこを選びました。しかし、続けてこう書いてあります。「13 ところが、ソドムの人々は邪悪で、【主】に対して甚だしく罪深い者たちであった。」ソドムが邪悪な人たちであったのにもかかわらず、その土地の豊かさのゆえにそこに住み始めたのです。

そして彼は、ソドムの中に住みました。その時に、王たちの戦いに巻き込まれて、ロトとその財産を奪い取られて行きました。おじのアブラハムは、そのことを聞くと訓練を受けた 318 人を連れて、王たちからロトとその家族、財産を奪還しに、ダマスコまで行きました。そして、ソドムを主が滅ぼされる話になります。創世記 19 章です。「19:1 ロトはソドムの門のところ座っていた。」とあります。これは、自分がソドムの町で行政官になっていたことを示しています。

ここから分かってくることがあります。彼は、目の欲によって確かにソドムに住んでしまった。けれども、放牧に適していたということであり、それらの罪に引き寄せられていたわけではなかった、

ということです。ですから、もちろん、ここから教訓を得ます。たとえ自分は罪を犯さないと決めていても、罪に近づくことは愚かであるということです。ロトは愚かでありました。けれども、彼は、おじのアブラハムの神を信じていました。つまり、彼が正しいとされているのは、彼の神に対する信仰であって、彼の行いが優れているからということではないということです。

その正しさは、神を信じる信仰から来ています。「ロマ 4:5 しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。」神を信じる信仰によって、御霊によって心と思いが新しくされます。そして、その御霊の思いが、罪や不正に対して心を痛める、心の柔らかさを造っているのです。

## 2B 不法な行いに対する心痛

7-8 節を再び読みます。「<sup>7</sup> **そして、不道德な者たちの放縦なふるまいによって悩まされていた正しい人、ロトを救い出されました。<sup>8</sup> この正しい人は彼らの間に住んでいましたが、不法な行いを見聞きして、日々その正しい心を痛めていたのです。」**

ロトの心がここに書いてあります。不道德な者たちの放縦なふるまいに、悩まされていたとあります。これは、苦悩していたという意味合いです。そして、「**心を痛めていた**」とありますが、これは心理的に拷問されていたというような意味です。ロトの家に御使いが泊まった時に、若い者も年寄りも、男たちがやってきて、家の中にいる者たちを知りたいと言ったのです。これは、集団の同性愛レイプです。彼がやめてほしいと嘆願したら、今度はロト自身に迫ってきます。御使いが目つぶしをくらわせたので、ロトは助かりましたが、こんなにひどい環境の中に彼はいました。しかも、彼は行政をつかさどる役人でしたから、その葛藤は相当なものだったでしょう。

これこそが、私たちが信仰によって生きる時に与えられている葛藤です。イエス様は、「マタ 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。」と言われました。神の国の義に自分が満たされています。しかし、今の世はそうなっていません。そこから出てくる葛藤です。私たちは、この葛藤を抱いている時に、自分は何かおかしいのではないかと悩みます。周りの大勢は、全く葛藤を覚えず、正しいことだと考えているのに、自分だけが間違っていると悩んでいる、と。いいえ、そうではないのです。御霊によって、今の世に対して地の塩、世の光となるべく、葛藤を与えてくださっているのです。世が左を向いて皆が歩いている時に、自分だけは霊において、「これは間違っている」と、信号を送ってくれているのです。

## 3A 誘惑からの救い 9

パウロは、テサロニケ第二の 2 章で、御霊の働きを「引き止めるもの」として言い表しています。「2:7 不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」反キリストの霊は働いているのですが、それを私たちの内におられる

御霊が、反キリストの現れを引き止めておられるのです。ですから、私たちはとてつもない葛藤を覚えます。悪が善とされ、善が悪とされる時代に私たちは生きています。

しかし、約束があるのです。「<sup>9</sup> 主はこのようにされたのですから、敬虔な者たちを誘惑から救い出し、正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるのです。」敬虔な者たちを救い出されるという働きです。

### 1B 救われるまで待つ方

ロトがどのように救われたかを思い出してください。御使い二人は、ロトに対して、こう言いました。「創 19:12-13 その人たちはロトに言った。「ほかにだれか、ここに身内の者がいますか。あなたの婿や、あなたの息子、娘、またこの町にいる身内の者をみな、この場所から連れ出さない。私たちは、この場所を滅ぼそうとしています。彼らの叫びが【主】の前に大きいので、【主】はこの町を滅ぼそうと、私たちを遣わされたのです。」今にも滅ぼそうとしているから、あなたと、あなたの身内の者は逃げなさいと促しています。それでロトは、すでに嫁に行っている家に行き、婿たちにいっしょに行くように言いますが、彼らには冗談のように聞こえました。

それで御使いたちは、こう言います。「創 19:15-16 夜が明けるころ、御使いたちはロトをせき立てて言った。「さあ立って、あなたの妻と、ここにいる二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」彼はためらっていた。するとその人たちは、彼の手と彼の妻の手と、二人の娘の手をつかんだ。これは、彼に対する【主】のあわれみによることである。その人たちは彼を連れ出し、町の外で一息つかせた。」彼らを何とかして救い出すために、もう遅すぎるほど忍耐して待っていて、彼らを町の外にまで連れ出しました。

そして、ロトは御使いたちから、山に逃げなさいと強く促します。またうしろを振り向いてはいけな  
いと注意します。けれどもロトは、山に行くまでに災いが追いついてしまうので、「あそこの町は逃  
れるのに近く、しかもあんなに小さい町です。どうか、あそこに逃げさせてください。」と願いま  
す(19:20)。そしてその、わがままにさえ思える願いを御使いは聞いて、「よろしい、わたしはこの  
ことでも、あなたの願いを受け入れ、あなたの言うあの町を滅ぼさない。急いであそこへ逃れな  
さい。あなたがあそこに着くまでは、わたしは何もできないから。(19:21-22)」と言います。

ここまで、ロトを救うことに心を留めているのです。これが、正しい者を救われる主のみこころで  
あり、思いなのです。アブラハムが、ソドムの町のために執り成している中にも現れていました。主  
が、ソドムの町を滅ぼすことを知ったアブラハムは、訴えました。「創 18:23 あなたは本当に、正し  
い者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。」正しい者が、悪い者と共に滅ぼし尽くされては  
いけないと訴えているのです。それで五十人いたらどうしますか？と尋ねたら、「その人たちのゆ  
えに、その町のすべてを赦そう。」と言われます(18:26)。アブラハムは焦って、どんどん人数を下

手して、交渉していきました。下げられるところまで下げたのです。十人まで下げました。すると、主は、その十人のために町全体を赦すと言われたのです。しかし、十人もいなかったので、滅ぼされたのです。しかも、ロトとその娘たちがそこから出ていくまでは、待っていたのです。

これが、「**敬虔な者たちを誘惑から救い出**」す、ということです。主は、教会に対しても、同じ約束をされています。フィラデルフィアにある教会に対して、「黙 3:10 あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。」ここの「時には」というのは、「時から」と訳することができます。つまり、世界にやって来る大患難の時そのものから、守られるということです。つまり、ロトがソドムに対する神の裁きから、ソドムから出ていくことによって免れました。それと同じように救われます。ガラテヤ書では、こうあります。「ガラ 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。」

ロマ 5 章で、こう言っています。「5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」テサロニケ人への第一の手紙 5 章にも、書かれています。「5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」そして、その御怒りを免れるようにするにあたって、その手前、4 章には、主ご自身が天から下ってこられて、キリストにある死者がよみがえり、生き残っている者たちも、引き上げられて主にお会いすることが約束されています。この地上からいなくなることによって、地上に下る大きな患難から免れるのです。

## 2B 正しくない者の処罰

ここで大事なものは、私たちの今、受けている患難は、世からのものだということです。「16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」この「世」というのは、悪魔が支配しているところです。「Iヨハ 5:19 私たちは神に属していますが、世全体は悪い者の支配下にあることを、私たちは知っています。」ですから、私たちは、キリストのみこころを行うとすると、世から奇異に見られ、馬鹿にされたり、中傷を受けたりします。

しかし、大患難は、悪魔からのものではないのです。むしろその逆で、聖なる、正しい神が、罪と不正にまみれている世に対して御怒りを下す時なのです。同じ患難という言葉でも、一つは、神のものとしてされている者たちに対する悪魔の攻撃であり、もう一つは、そうした世に対して、神が御怒りを下されるところの患難なのです。ですから、後者からは私たちは救い出されるのです。

そして、「**正しくない者たちを処罰し、さばきの日まで閉じ込めておくことを、心得ておられるので**

す。」とあります。地上の裁判において、拘置所と刑務所があります。犯罪を犯したとされる者たちを拘束しているのが、拘置所です。そして裁判において刑が確定すると、刑務所に送られます。それと同じで、正しくない者たちは、ハデスに閉じ込められます。そして、さばきの日、最後の審判の時によみがえらせられ、そこで主の前で、行いの書にしたがって裁かれて、刑務所である、ゲヘナに投げ込まれるのです。

私たちはみな、このゲヘナに投げ込まれて当然の者たちです。神に対して罪を犯しました。けれども、そこから救い出されるのは、もっぱら神の恵みと憐れみです。イエス様が、十字架の上で、神の御怒りを身代わりに受けてくださいました。ですから、この方に信頼する者が、これまでの罪が見逃されて、キリストにある私たちを神は見てくださいます。義とみなしてくださいます。それで、神の御怒りの日には、私たちをロトのようにこの世から救い出されるのです。

主は、みなさんの心の悩みを今、見ておられます。神の義を知っているがゆえに抱いている、心の悩みです。それは、御霊がくださっているものです。主が、この世に裁きを下すとお決めになっている日が来たら、キリストは来られます。そして、その葛藤からも自由にされ、キリストの栄光の中に入るのです。